

受賞パンフレット



“往来”と“all right”

—都市と農山漁村の共生・対流表彰事業—

第18回 オーライ!ニッポン大賞



主催：オーライ！ニッポン会議（都市と農山漁村の共生・対流推進会議）

協賛：一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構

後援：総務省、文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、国土交通省、環境省、
一般社団法人日本経済団体連合会、全国知事会、全国市長会、全国町村会

「オーライ！ニッポン」とは

都市と農山漁村の間の“人・もの・情報”の往来（おうらい）を盛んにすることで、日本全国が元気（All right）になることをめざす国民運動「都市と農山漁村の共生・対流」のキャンペーンネームです。

第18回 オーライ! ニッポン大賞 講評

都市と農山漁村の共生・対流とは、都市と農山漁村を相互に行き交うライフスタイルを広め、都市と農山漁村の双方が元気を取り戻すことをめざす国民運動です。

この運動を進めるために、都市と農山漁村の共生・対流に関する優れた取り組みを表彰するオーライ!ニッポン大賞は、今回で第18回を実施することができました。これもひとえに現場で活動されている皆様のご尽力と、関係7省をはじめ、関連団体及び地方自治体等関係者の皆様の温かいご理解とご支援の賜物であり、この場をお借りして心より敬意と感謝を申し上げます。

また、全国からオーライ!ニッポン大賞53件、ライフスタイル賞10件、合計63件のご応募を頂きました。募集の周知にご協力いただいた関係者の皆様に改めて御礼申し上げます。

第18回オーライ!ニッポン大賞は、新型コロナウイルス感染症の流行により「三つの密」の回避や県をまたいで移動自粛などにより都市農村交流事業や農山漁村体験学習の機会の中止、延期が多数発生しました。そこで、コロナ禍の取り組みを将来へ繋げていくような新たな展開の芽を育てたいと考え、新型コロナウイルス感染症蔓延禍のなかで、心が折れそうになりながらも、なんとか新たな取り組みをはじめている関係者を讃え応援しようと「交流イノベーション部門」創設しました。

また、コロナウイルス禍により交流事業が停止・延期しているなど、対前年比を大きく下回る団体についても過去の取り組みを中心に評価いたしました。

全体の応募数は、対前年比67%にとどまりましたが、初応募は46件（73%）と前回の34件（36%）よりも大幅に増加し、交流イノベーション部門も29件と新しいチャレンジが多数ありました。

また、SDGsを意識した取り組み、Z世代と言われる若者の応募があり将来がとても楽しみです。

都市部からの移住や都市と農山漁村を行き来する二地域居住等、個性的で魅力的なライフスタイルの実践者を表彰するライフスタイル賞では、地域おこし協力隊等、農山漁村に移住して自分の理想とするライフスタイルの実現や農山漁村地域資源を活かしたコミュニティ・ビジネスの実践等、今後の地域活性化に新しい可能性をもたらすものと期待されます。

審査委員会における選考の結果、オーライ!ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）1件、オーライ!ニッポン大賞3件、審査委員長賞4件、ライフスタイル賞4件の計12件を選定いたしました。

グランプリに輝いた「一般社団法人 竹田文化共栄会」（福井県坂井市）は、800年の歴史を有する中山間地域です。他の農山漁村と同様に、人口減少、高齢化が進み、住民総意で小中学校を閉校にしましたが、その後地域の活動の火を消さないためにも住民や部外者の学生にも参加して地域ビジョンをまとめました。自分達の地域をどうするのか、自らの意思や考えを共有しつつ合意形成を得て活動を導きだしたのです。その結果として交流人口等の増加、雇用増、女性の雇用と活躍等々で大きな成果を挙げています。

今、全国の地域で求められているのは、自ら歩む道を考え、まとめ、描いたビジョンを皆で協力して成し遂げていくことではないでしょうか。その他各賞の取り組みも行動することにより、都市と農山漁村の共生・対流の新しい未来が導きだされています。その活動を各ページに紹介しておりますので、ご覧ください。

惜しくも受賞を逃された皆様の中にも魅力的な取組が数多くございました。今後、さらに充実した活動を継続されて再度のご応募いただきますよう、心からお待ちいたしております。

最後に受賞者の皆様をはじめ、関係するすべての皆様にこれまでの共生・対流に対するご尽力に感謝申し上げますとともに益々のご活躍とご発展を祈念いたしまして講評に代えさせていただきます。

令和3年6月11日

オーライ!ニッポン大賞

審査委員会

会長 安田 喜憲

オーライ! ニッポン大賞グランプリ

一般社団法人 たけだぶんかきょうえいかい 竹田文化共栄会 さかいし (福井県坂井市)

内閣総理大臣賞

【800年の歴史を誇る中山間地域】

坂井市東部に位置する丸岡町竹田地区は、丈鏡山（たけくらべやま）や火燈山（ひともしやま）などの山々に囲まれ盆地状に開けた中山間地域です。その歴史はおよそ800年前に遡り、白山信仰の吉谷寺を中心に栄え、福井県最古の住宅「千古の家」（江戸時代初期の建立）が、往時の豊かな生活を感じさせます。明治22年竹田村となり、昭和32年に丸岡町に合併するまで、林業を中心にその歴史を刻んできました。一般社団法人竹田文化共栄会は、こうした山林資源の保全、森林経営等を行う目的で1964（昭和39）年に設立されました。



【地区住民の総意により廃校を、体験型宿泊施設にリニューアル】



人口減少により竹田小学校と丸岡中学校竹田分校を地区住民の総意により廃校とし、地区の特色を活かしたまちづくりを推し進めるため、緑のふるさと協力隊や大学生といった地区外からの若者とも連携し、地区が抱える課題とその解決のための方向性について検討を重ねて、2016年3月に「竹田の里将来ビジョン」を策定しました。以後そのビジョンにもとづきむらづくりを推進し、同年7月には、廃校をリノベーションした体験型宿泊施設「竹田農山村交流センターちくちくほんぼん」をオープンさせました。また、県内外の大学生が空き家を拠点として活動。地区住民と行政が連携しながら地域課題を解決する活動「竹田Tキャンプ」により、ただの訪問者と受入先という関係を越えた、地縁でも血縁でもない絆（第3の縁）が育まれています。

【安全な場所は、交流人口の拡大も可能】

ちくちくほんぼん内には、地区の木材を活用して作られたおもちゃが並び、小さな子どもが、木の持つ温かさや柔らかさに触れることができる場所「木育ガーデンTOY」があります。コロナ禍には、貸し切り利用による安心して子育てができる場所として多くの方に利用いただきました。また、冬季においては、温暖化による雪不足の影響のため休業する県内スキー場もある中で、グラウンドを利用した「スノーパーク」（雪のすべり台などを作り運営）は、県内外から予想以上に多くの方が来場されるなど、コロナ禍で利用者数は減少したものの、好評を得ました。コロナ禍でも交流人口の維持・拡大が可能であると実感しました。ちくちくほんぼん利用者数実績：約98,000人、木育トイレーム利用者数実績：約2,500人、スノーパーク利用者数実績：約2,500人



■写真の説明

(写真上)ちくちくほんぼん関係者集合 (写真中央・左)役員による山林整備作業 (写真中央・右)地元大学生との共催事業

■連絡先 〒910-0203 福井県坂井市丸岡町山口60-8 坂井市竹田農山村交流センター ちくちくほんぼん
☎ 0776-50-2393

かつては豊富な山林資源を活かした製炭や銅山で栄えたが、木炭離れ、銅山閉山などで徐々に人口減少が続き、小学校も廃校となったが、地域住民が主体となって地域再生の取り組み（ボトムアップ型）が貫かれ、交流人口等の増加、雇用増、女性の雇用と活躍等々で大きな成果を挙げていると高く評価されました。

オーライ! ニッポン大賞

特定非営利活動法人 自然史データバンクアニマnet (栃木県栃木市)

【なぜ、生物多様性が重要な?】

特定非営利活動法人 自然史データバンクアニマnetは、栃木県において自然史資料の収集と蓄積を行い、それに基づいた環境学習や自然体験などの活動を展開し、次世代の人材育成、野生鳥獣の管理、生物多様性の維持を柱に活動するNPO法人です。普及啓発活動として、毎月第2・第3土曜日にイベントを開催しています。生物多様性という言葉をよく耳にする様になりました。しかし、なぜ生物多様性の維持管理が必要なのかは、あまり知られていません。我々の生活は、生物多様性が支える生態系サービスにより支えられている事を、次世代を担う子どもたちや広く市民に知ってもらう必要があると考えて活動しています。



【アウトドアクッキングを楽しみながら森で過ごす「森カフェ」】



第2土曜日は、とちぎ環境・みどり推進機構が実施する森林・山村多面的機能発揮対策交付金により整備された里山を活用し「森カフェ」を実施しています。森カフェは、親子で森林資源と生物多様性からもたらされる生態系サービスを実感して頂く為に、森の中にカフェを作り、アウトドアクッキングを楽しみながら森で過ごすプログラムです。カフェは間伐材を活用してログデッキやテーブル、ベンチなどを参加者と共に作成しました。また、アウトドアクッキングは、耕作放棄地を再生し農薬・化学肥料を使わずに有機肥料のみで育てた野菜や小麦粉を使って実施しています。

【親子で里山の生き物を調査する】

第3土曜日は、里山の生き物たちを親子で調査する「生きもの調査隊」を実施しています。森カフェと同様に、みどり推進機構の交付金により整備された里山で、これまで9年に渡り四季を通して生き物調査を実施し、見つけ出した生き物を記録しています。採集した昆虫やカエル、時にはヘビなども子どもたちがスケッチをし、生き物マップを作製しています。スケッチをする事で、生き物をよく観察する習慣と力を学びます。これを毎月実施する事で、環境の変化や生態系の移り変わりを深く知る事ができます。また、午後のプログラムでは農業体験やクラフトなど、調査してきた環境からの恵みを活かした体験も実施しています。耕作放棄地を再生し農業を体験し、それらの作物は森カフェで調理します。落ち枝で鉛筆を作り、森で素材集めをしてリースを作るなどのクラフトを通して、生態系サービスを実感できるプログラムです。



【あつまれ! 自然好き】

9年間継続してきた調査隊の参加者、当初小学一年生だった少年が、現在ではスタッフとして後輩の指導や近隣の小学校のアドバイザーとして、学校での普及教育にも参加できるようになりました。また、スタッフとして参加してきた若者2名が、農業と店舗経営で独立し新たな雇用創出にも繋がっています。遠方より参加してきた親子が、移住するなど地域活性の成果も生まれています。

■写真の説明

(写真上)ブッポウソウ目カワセミ科カワセミ属 (写真中央・左)森カフェ (写真中央・右)生きもの調査隊

■連絡先 〒328-0101 栃木県栃木市都賀町大柿1155

☎ 080-5090-8871

里山に親しみ生態系を実感できる機会を作り、教育旅行にも活用しようとしている点が素晴らしい。森カフェの運営や古民家改修など拠点事業を、アニマ会費やみどり推進交付金など安定財源を確保している点もSDGsに沿っている。森の中の自然現象に触れることにより人間が得ることのできる栄養は計り知れないと高く評価されました。

オーライ! ニッポン大賞

元 沼津市地域おこし協力隊 あお やま さ おり 青山沙織

ぬまづし
(静岡県沼津市)

【無価値とされた深海魚に着目】

深海魚は一般的に価値が低いと見なされ漁師の収入も多くなく、深海魚漁師になりたい若者達もいないという状況です。青山沙織さんは、その深海魚の魅力と沼津市戸田（へだ）をPRし深海魚を身近に感じてもらう仕組みを作ることが必要と考えて、深海魚に着目したイベントや通販のアイデアを練り出し、深海魚を船から直接買取り、その日のうちに発送する「深海魚直送便」をスタートさせました。鮮度の良い深海魚は、スーパーで買うより安く鮮度の良い状態で購入できると大人気となっています。



【深海魚や地域の魅力を都市へ】



青山さんのビジョンは、「地域の方に農山漁村の魅力を再認識してもらい、地域の中から元気にしていく」です。具体的には、地域の中から、漁業の魅力を発信し、価値を高めていくことにより、漁業者を支援する。あらゆる角度から、都市と漁業者と関わりたい人との橋渡しを行うという取り組みをしています。海が身近でない兵庫県尼崎市で育ち、海を身近に感じる生活に憧れて、2018年4月に深海魚担当の地域おこし協力隊として、静岡県沼津市戸田に赴任しました。図鑑やテレビでしか見たことのない深海生物達は、青山さんの目にはキラキラした宝の山に映りましたが地域の方は安く価値の低い物、商品にならない物という認識でした。そこで、深海魚には価値があるのだと地域の方の意識改革と深海魚を知らない人へ、深海魚や農山漁村の魅力を発信する必要があると考えました。

まず戸田という町を全国の人に知ってもらい、深海魚を身近に感じてもらう仕組みを作ることが必要であると考えて、『駿河湾の深海魚アートデザインコンテスト』を開催しました。戸田のホームページを見てイメージする深海魚を描いてもらうという募集内容です。次は、足を運んでもらうために、深海魚づくしのイベント『深海魚フェスティバル』を地域の方と一緒に作り上げたところ、第1回第2回と開催しましたが、新型コロナウイルス感染症の影響により第3回目の開催は中止となり、新たな試みとして『深海魚直送便』という事業をスタートさせました。

深海魚直送便は、①消費者が魚種を選ぶのではなく、その日獲れた魚を【お楽しみボックス】のようにランダムに箱詰めすることによりロスを無くし、市場より高い価格で魚を買取ることにより、漁師の収入アップにつながります。②傷みやすい深海魚は一般消費者のところまでは流通しませんでした。船から直接買取りその日のうちに発送して、鮮度の良い魚を全国（家庭）へ発送しています。③深海底引網漁では、市場で取引されていない魚、価値がないと今までは全て海に返されていた深海魚を『ヘンテコ深海魚便』として届けています。今まで価値がないとされた魚を買取る事により、漁師さんの意識も変わりつつあります。戸田漁業協同組合や地元漁師の方の協力により徐々に地域の理解を得る事が出来て、各方面から大きな反響を得てSNSのフォロワーも急上昇しています。

まず戸田という町を全国の人に知ってもらい、深海魚を身近に感じてもらう仕組みを作ることが必要であると考えて、『駿河湾の深海魚アートデザインコンテスト』を開催しました。戸田のホームページを見てイメージする深海魚を描いてもらうという募集内容です。次は、足を運んでもらうために、深海魚づくしのイベント『深海魚フェスティバル』を地域の方と一緒に作り上げたところ、第1回第2回と開催しましたが、新型コロナウイルス感染症の影響により第3回目の開催は中止となり、新たな試みとして『深海魚直送便』という事業をスタートさせました。



■写真の説明

(写真上)深海魚直送便の内容 (写真中央・左)深海魚フェスティバル(ふれあい) (写真中央・右)深海魚直送便のチラシ

■連絡先 〒410-3402 静岡県沼津市戸田3951

☎ 080-8312-2489

地域おこし協力隊として担当した地域の主要産業である漁業で、深海魚に目をつけ、地元漁師の協力で深海魚に関する様々なイベント企画実施や、さらに漁業関係者とのコラボで「深海魚直送」事業により、新たな付加価値を付けた深海魚の販売ルートを切り開き、地域の漁業振興に大きく寄与した点が高く評価されました。

オーライ! ニッポン大賞

ひょう きち や
有限会社 兵吉屋

(三重県鳥羽市)

【後世に海女文化を残すために働く場と海の資源を守り育てる】

海女である社長の実母が海女小屋を開放し、海女さんとふれあう海女小屋体験を日本で始めて開始しました。海女小屋は3000年の昔から命がけの素潜り漁でアワビ、サザエ、ワカメやヒジキ等の海藻を獲り、生業を立てる海女が冷え切った体を温め仲間と談笑する憩いの場所です。海女小屋体験は国内外からの往来を盛んにし、お客様と海女さんが一体となって喜びや幸せを感じる価値の共創の場となっています。鳥羽市には約500人と、日本一の海女の数を誇っていますが、海女も高齢化、後継者不足により減少しており、海女文化を後世に残すためにも漁業と観光の融合による国内外の人々との交流の機会を増加させ、海女の働く場と海の資源を守り育てる活動を推進しています。



【日本初の海女小屋体験のおもてなしの事業化】



海女小屋体験（海女小屋はちまんかまど）のおもてなしの事業化は、日本初の取り組みです。2004年に米国のお客様から「海女さんとふれあいたい」という要望が鳥羽市に入り、殆どの海女が受入に難色を示す中、海女で社長の実母が「地域のPRになれば」と二つ返事で引き受け、日本で初めて実際に使用している海女小屋を開放し、海女さんとふれあう海女小屋体験が始まりました。以後多数のメディアに取り上げられ伊勢志摩の観光業界に大きな影響を及ぼしました。その後、鳥羽市と志摩市に公が運営する海女小屋体験施設が4つもオープンし、周辺の宿泊施設にも設けられ、「海女」を観光商品として誘客する取組が生まれました。2004年はアメリカからのお客様700人程でしたが、2019年には2万人(国外、国内各1万人)を超える交流に成長しました。特に何度もリピートされるお客様とは深い交流が生まれています。

【長男が12年前にUターンし事業を切り盛り】

この新産業の創出により、県外で働いていた長男が12年前にUターンし、調理師免許を取得し、高齢の海女をサポートしながら、海女小屋を切り盛りしています。海女小屋体験が周知されるようになり、鳥羽市では「海女」を守り育てていく機運が高まり総務省の地域おこし隊として鳥羽に住み、海女として活躍されている女性や都市から相差町に嫁いだ女性が海女にチャレンジしています。海女文化の継承と資源の保全・育成に向けて、5年前から鳥羽市にアワビの稚貝放流のために寄付も始めました。



また、地元相差保育所の園児を海女小屋に招待し、園児からは「貝が美味しかった。大きくなったら海女さんになりたい。」という感想をいただき、海女文化にふれていただく貴重な機会になっています。その他、海女ゆかりの神明神社・石神さんのお守りをデザイン製造し、海女の獲るアワビを熨して、熨斗アワビを製造し、本物の「のし袋」を販売しています。コロナ禍では、三重県内の小中高の修学旅行先が県内になり、愛知県、滋賀県の都市部の学校からも海女文化にふれ、また食育の場として、「海女小屋はちまんかまど」に多数来所いただき、2021年度も修学旅行の予約が入っています。

■写真の説明

(写真上)海外からの海女小屋体験者 (写真中央・左)海女小屋で新鮮な魚介類を食べる体験者
(写真中央・右)コロナ禍になり、2020年5月に通販「海女小屋はちまんかまどお届け便」をスタート

■連絡先 〒517-0032 三重県鳥羽市相差町1094
☎ 0599-33-6145

3000年の歴史がある海女文化の継承と地域資源保全・育成に全国でいち早く取り組み、観光の結びつけが難しい漁業の関連分野に異業種から参入し、成果をだしていることや、国内客、外国客ともに着実に増加。総計2万人を超えた盛り上がりを見せる「海女小屋体験」を旅行商品として育ててきた実績は高く評価されました。

オーライ! ニッポン大賞 審査委員会長賞

認定特定非営利活動法人サービスグラント (東京都渋谷区^{しぶやぐ})

「プロボノ」とは、職業上のスキル・経験等をボランティアとして提供し、社会課題の解決に成果をもたらすことです。「公共善のために」を意味するラテン語が語源となっています。2011年からスタートした「ふるさとプロボノ」は、大都市圏のビジネスパーソンやクリエイターなどが5～6人のチームを編成し、日本各地の地域コミュニティの課題解決や地域経済の自立を応援する地域交流型プログラムです。

認定特定非営利活動法人サービスグラントは、関係人口をいかに増やすか、経済活動をどう維持展開させていくのかといった地域の課題解決に取り組む行政機関、企業、協会、NPO法人、住民自治組織など多様なプレーヤーとプロボノチームのマッチングを行い、具

体的な成果物の提供を通じて地域づくりを応援しています。その実際の成果としては、空き家オーナーの応募が予定の3倍になったり、米粉商品の売り上げが伸びたりと、地域への大きな効果が出ています。



【スローガン：心のどこかが、移住する】



2020年「ふるさとプロボノ」参加者アンケートの結果、97%が「農山漁村と長期的・継続的に行き来することに関心が高まった」、90%が「将来的に、農山漁村に移住・定住することに関心が高まった」と回答し、プロボノチームの心の変化としても、地域への交流・移住・定住への関心も高まる効果が現れています。本取組では、移住や関係人口に関心を持つ人や社会課題になんらか役立ちたいとプロボノ登録する人とを効果的に繋ぎ合わせ、急速な人口減少等の問題を抱える農山漁村地域を応援。5人前後からなる立候補者でチームを編成し、2カ月～4カ月のプロジェクト期間中、チームは現地への1泊2日～2泊3日の合宿形式によるヒアリングやフィールドワークを通じて、活動への思いや地域の

特色、取り巻く関係者の声をしっかりと受け止め、理解を進め、さらにオンラインツールを活用し、現地協働者との打ち合わせなどを実施しながら、関係を深めました。

【5人の社会人チームが現地課題解決に役立つ具体的な成果物を作成】

プロボノチームは、プロジェクト期間中、農山漁村などのNPO法人や、特色あるまちづくりに取り組んでいる自治体、地域の新しい経済や産業のあり方に挑戦している事業者などと協働しながら成果物の完成を目指します。その際、協働先の農家や林業者・漁業者等のもとを訪れ、直接農林水産業の基礎知識を教わり、実際の現場に触れる「しごと体験」を行っています。地域の現状や言葉だけでは伝わりづらい感覚などもしっかりと理解したうえで、団体が抱える課題を把握することで、提案する成果物の有効性を高めています。

都市との交流の促進、関係人口の増加、経済活動の維持発展等を進めることで、地域課題解決に取り組む農山漁村。活動を担うプレーヤーの方々の実行力を高めるプロボノの成果物と共に、都市と農山漁村の継続的な関係を支えようと「ふるさとプロボノ」が貢献しています。



■写真の説明

(写真上)長野県高山村にてワインぶどう摘み取り体験の様子 (写真中央・左)長野県伊那市にて林業体験の様子 (写真中央・右)兵庫県市川町にて農業の実態をヒアリングの様子

■連絡先 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1-2-10 中里ビル4F
☎ 03-6419-4021

ビジネスパーソンやクリエイターがスキルをいかして課題解決を応援。都市住民にとって魅力的な「オーライの入り口」になっている。2020年度は22プロジェクトに139名が参加。12年間で約400人が農山漁村を訪問と大きな成果を挙げている。関係人口の入り口として機能し、都市住民が農山村に関わるためのプラットフォームとして高く評価されました。

オーライ! ニッポン大賞 審査委員会長賞

特定非営利活動法人 小さな村総合研究所 (山梨県丹波山村 たばやまむら)

全国の小さな村と連携して、里山暮らしの情報発信と都市との交流事業の企画立案や里山ビジネスの調査研究により交流人口の拡大、移住・定住の促進、地域資源を活かした起業の支援等を行なおうと2017年に村民有志11名で設立しました。交通空白地に認められた国の制度を活用し、ボランティアドライバーによる有償タクシー【ソentak】の運営や丹波山村から運営委託を受け、2020年2月東京都大田区・JR蒲田駅ビルに情報発信と協働相談窓口のオフィスを構え、4月から人口の少ない7つの村（北海道音威子府村、福島県檜枝岐村、山梨県丹波山村、和歌山県北山村、岡山県新庄村、高知県大川村、熊本県五木村）と【小さな村g7ショップ】での特産品も販売しています。



【ソentak】は、たばやま村民タクシーの略です。村民の1割に当たる54名がボランティアドライバーとして登録、年間200名を超える利用者は、村内の高齢者だけでなく、雲取山や大菩薩嶺などの登山客が半数以上で、村民自らが行うミニ観光案内所と化していて、後日にお礼の電話をもらうなど、たばやま村のファンづくりに繋がっています。



【小さな村g7サミット】は、2016年5月、全国7地域の最も人口の少ない7つの村に呼びかけ、伊勢志摩で開催された本家「G7」サミットの一週間前に、小文字の「g7」サミットを丹波山村で初開催以後2017年福島県檜枝岐村、2018年北海道音威子府村、2019年和歌山県北山村と開催、2021年10月には岡山県新庄村で開催予定です。2019年には、東京渋谷サブカルチャーの聖地「東京カルチャーカルチャー」で東京会議を開催、20代の若者たち12名と7村長が意見交換、【7つの小さな村の首都圏拠点事業】丹波山村が事業主体となり、運営委託を受けたNPO法人小さな村総合研究所が2020年2月に、JR蒲田駅ビル・グランデュオ蒲田（JR東日本商業開発）にオフィスを構え、首都圏での情報発信と首都圏の産官学NPOからの協働相談窓口を展開しています。2020年4月より7つの

小さな村の特産品を販売し2022年3月までの期間限定ショップです。

【多摩川keep our river clean プロジェクト】

多摩川源流の小さな村として、河口域の大田区とのコラボプロジェクトです。蒲田発 多摩川源流 丹波山村 直行バス：大田区JR蒲田駅前から丹波山村への直行バスを、2019年に7月「夏祭り丹波山」9月「舞茸祭」2020年1月「御松曳」と3回に渡り丹波山村へ無料の直行バスを企画し、トータルで200名近い大田区民を丹波山村へ案内し、丹波山村民との交流イベントに参加しました。以降はコロナ禍のため中止。その他、【首都圏の高校、大学、NPOへの出前授業】、【たばやま薬膳ピクルス】、【西東京調理師学校との特産品メニュー開発コラボ】、【23区内の調剤薬局やデイサービスとの特産品販売コラボ】等を展開しています。



■写真の説明

(写真上)蒲田発丹波山村直行バス2019 (写真中央・左)小さな村g7サミット東京会議2019 (写真中央・右)小さな村g7ショップ 丹波山村長の1日店長2020

■連絡先 〒409-0300 山梨県北都留郡丹波山村966

☎ 080-2385-0211

公共交通空白区を利用するボランティア有償タクシー利用は全国各地で応用可能。東京に近いという利点をうまく活用した取り組みは、福岡、大阪圏、名古屋、仙台、札幌周辺の町村に影響を与えるだろう。小さい村ながら様々なアイデアを出し続ける姿勢や小規模のムラが、つながることのシナジー効果を最大限に活かす活動は高く評価されました。

オーライ! ニッポン大賞 審査委員会長賞

特定非営利活動法人 Peace & Nature (兵庫県神戸市)

【大都市の農村地域で国際的にSDGsに取り組む】

2003年に代表のバハラム・イナニルさんが活動を開始しました。2006年にNPO法人化。神戸をベースに日本人と外国人が共に活動する国際NPO法人です。子どものアレルギーの解決方法として農業を使わない農業塾を行い、また食と環境づくりの大切さを学び、環境活動の一環として、有機農業と森の活動を開始しています。自然から学び、地域や社会の課題を知り、解決に向けて行動する人材「未来のグリーンリーダー」の育成のために国内外の子どもたちの健全育成と農山村の活性化と都市と農村の交流を促進しています。



【食と農 「休耕田を再利用した有機農業の推進」】



バハラム代表は、イランのテヘラン出身、イラン・イラク戦争を体験し、日本の平和に憧れて24歳の1989年来日しました。生まれた子供がアトピー性皮膚炎だったので、食生活が原因ではないかと農業に強い関心を持ち、神戸大学名誉教授の保田茂先生に出会い、環境と食のつながりの大切さを教わり保田先生の農業塾に通い、農薬や化学肥料を使わない方法を学び、田んぼや畑を借りて実践するうち、外国人の友人たちからも参加させてほしいという要望が出てきました。日本全国で広がる地域の高齢化、空き家、休耕田の増加などの課題を抱えているなかで私たちは地域の方々のご協力の元、メンバーと共に荒れた休耕田を耕し、野焼きを行い、田んぼとして再利用しています。活動の3本柱は、①食と農＝農薬を使わないお米・野菜・ハーブづくり、②環境＝六甲山や大沢エリアでの森づくり・空き家再生、③人間力＝自然体験・国際交流・地域活動となっています。持続可能な社会を共に作ろうと、2015年国連サミットで採択されたSDGsの17の目標をゴールに、特に4番の質の高い教育をみんなに、13番の気候変動に具体的な対策を、17番のパートナーシップで目的を達成するために力を入れています。現在、38か国のメンバー 450名、法人メンバー 39社が在籍しています。グローバルなメンバーが活動

するため、バイリンガル（日・英）で開催しています。様々な国のメンバーがSNSを通じ、それぞれの言語で、日本での活動を世界へ発信しています。年間スケジュールを組み、都会から日本人や在日外国人をはじめ、幼稚園から大学、国際学校のスクールトリップとして、また企業の社員研修として多くの方が参加し、“楽しむ”をモットーに、地域にて交流を推進しています。昔からの農法で行う無農薬の米作り（田植え・稲刈り）は人気のプログラムとなっています。

【農業を学びの場としてとらえ、温故知新に学ぶ】

農地は都会の人々にとっては、地に足をつけて体験できる、生きた学びの場です。農業も生きた教育の一環として、プログラムに組み込んでいます。地域の方々には、我々の活動を「教育」としてご理解を頂き、様々な形でご協力をいただいています。新型コロナウイルス感染症が蔓延する前は、イギリス、インド、カナダ等からの学生インターンシップを受入れ、「日本の農業体験・地元の農家さん宅ホームステイ」も行っていました、地域に残る「日本の伝統・文化」は外国人に大変好評で、日本の学生や子どもたちにも人気です。



■写真の説明

(写真上)仲間と農作業を楽しむ (写真中央・左)NPO法人Peace & Natureのバハラム代表 (写真中央・右)菰樽ワークショップ

■連絡先 〒651-1525 兵庫県神戸市北区大沢町日西原47

☎ 078-779-7474

外国人のリーダーにより設立し国際的な交流の輪を広げているのが斬新。日本での活動を世界に発信し、38か国のメンバー 450人という数も素晴らしい。視野が狭くなりがちな日本の地域社会を世界に開くという意味で意義ある活動であり、SDGs17の目標をゴールに、独自性、モデル性、社会性は高く評価されました。

オーライ! ニッポン大賞 審査委員会長賞

ロコネクト合同会社

す おうおおしまちょう
(山口県周防大島町)

【オンライン島旅で都市部と地方をつなぐ】

2020年、新型コロナウイルス感染症により、生活様式は大きく変わりました。地方においても、都市部とのつながりが途絶えることは死活問題です。

都市から農山漁村への移住を考える人も増加しています。移住者を増やしたい地方にとっても好機とも言えますが、来訪移動に制約をかけられ、移住イベントやツアーが出来なくなりました。そこで、オンラインを活用することにより、都市部と地方をつなぐ「ロコネクト合同会社」を設立（「LOCONECT」はLocal(地方)とConnect(つなぐ)を合わせた造語)しました。

島で、クラスターが発生した場合、取り返しのつかない事態に発展します。そこで、旅行をしたくてもできない人たちと、今すぐに受け入れることはできなくてもオンラインで物販やPRをしたい島をつなぐ「Webで島旅」を企画して、全国の島で暮らす仲間へ声をかけ、利島、式根島、三宅島、神津島、八丈島、小笠原島、大三島、因島、江田島、向島、百島、六島、見島、種子島、対馬が参加しました。参加者には、大好きな島へ旅することはできなくても、全国の島、太平洋・日本海・瀬戸内海の同時配信により、今までできなかった、リアルタイムで全国の海を見る・島旅ができることを提案できました。



【地方のことは地方が自分事として考えないといけない】



その後、コロナ禍により、大阪で開催予定だった全国移住フェアの開催が難しいとの情報が入り、地方移住の機運が高まる中、地方自治体は都市部へPRに行けないという、不運な状況を打破するために「オンライン全国移住フェア」開催を決めました。地方のことは地方が自分事として考えないといけない、地方の受け入れ側、都市部の移住希望者、双方の意見を聞きながら2020年5月31日に開催した「第1回オンライン全国移住フェア」には38道府県138団体173組の相談者が参加しました。緊急事態宣言解除後、相談者は各地を訪問されて、移住したという報告が上がっています。

その後、移住希望者・地方の双方からの要望が高かったこと、つながる機会を喪失してはいけないと考え10月4日に第2回、2021年2月7日に第3回を開催しました。コロナ禍で閉塞感が漂う中、何もできないと諦めるのではなく、何ができるかを考え実践することで新しい都市部と地方のつながり方を、地方から提案できたことはとても有意義であったと思います。参加してくれた地方の人々皆の思いでできたイベントです。

【子どもたちがもっと自分の地域の可能性を伝える】

「地方で暮らしていても全国と繋がるイベントができるんだ」と子供たちに伝えて、子どもたちがもっと自分の地域の可能性に目を向けてもらえればと、移住希望者と地方が情報交換できるSNSサイト「えんがわ」も開設しました。

■写真の説明

(写真上)オンライン全国移住フェアの参加者画面

(写真中央・左)周防大島発移住フェア盛況の記事

(写真中央・右)周防大島町の風景

■連絡先 〒742-2302 山口県大島郡周防大島町椋野214-4

☎ 0820-72-1441



「コロナ禍だから」とあきらめない、見事な発想。全国の島を巻き込む力も素晴らしい。移住相談をオンラインで、いち早く仕掛けたのは、常に問題意識を持っていたからだろう。遠方であることのデメリットをなくし、オンラインだからこそ、首都圏に近い自治体とも対等に勝負できることを証明してみせた実績は高く評価されました。

オーライ! ニッポン ライフスタイル賞

寺内 昇さん、寺内 郁子さん

ほくりゅうちょう
(北海道北竜町)

【医師から宣告され仕事人間を改める】

「残念ですが、アルツハイマー型認知症です」2009年9月、53歳の昇さんは、医師から若年認知症と告げられました。アリセプトを服用しつつ、勤務先の上司・部下に若年認知症であることを告白し、朝から晩まで連続していた会議を全てキャンセルし、仕事量を減らし、記憶力・判断力は飛躍的に改善しました。



【移住し元気に暮らしている人の話を聞いて北竜町へ】



インターネットで若年認知症について色々調べていく中で、全国で活動を展開する若年認知症家族会「彩星（ほし）の会（本部・新宿区）」干場功代表との出逢いがあり、病やご家族の大変さ等のお話を伺いました。干場代表の出身である北海道北竜町では元町長が若年認知症を発症し、自叙伝スタイルの書籍出版が話題になり、また町内には、ボランティア団体・若年認知症家族会「空知まわり」が設立されていることや当時、干場代表のお力添えで東京からアルツハイマー型若年認知症の家族が北竜町に移住した人が元気に生活されていることも知り、2010年4月北竜町へ移住しました。

【夫婦で役割分担してまちの情報発信を担う】

2010年10月、役場からの依頼を受けて町の総合情報サイト「北竜町ポータル」を開設することになりました。サイト構築は初経験、独自ドメインの取得から試行錯誤を繰り返し、夫婦で妥協することなく、内容、デザイン・色合い等すべてについて、とことん話し合い8か月をかけ2011年7月、Google Siteを使った北竜町ポータルをオープンさせました。そして、町のイベント、農家の栽培、町民のお話等の様々な取材を重ねて、夫婦で役割分担して取材、写真撮影、記事作成、デザイン、情報発信に取り組んでいます。毎年開催される「ひまわりまつり」のひまわり開花状況を毎日写真撮影し、関係イベントの情報を全国に向けて発信し、アクセス数増加と共に2017年度のひまわりの里入り込み客数が過去最高を記録（35万6千名）になりました。また、北竜町民の方々からお話を聞き、取材を重ね約1700人の町の人口のうち、369人以上の北竜町民を紹介しました。

【ふるさと納税額急上昇。認知症も改善】

北竜町ポータル開設から2019年度まで累計訪問者数は200万人、閲覧ページ数は465万ページビュー、掲載記事も約5千件となりました。北竜町のブランド米「ひまわりライス」など、生産者等の北竜町への熱い想いと熱い活動を伝えて、返礼品の「ひまわりライス」を中心に、ふるさと納税額は、5年間連続3億円を超え2020年は6億円に達する人気です。現在は、「認知症は否認」という、北海道の専門医の診断書に基づき活動中です。



■写真の説明

(写真上)寺内 昇さん 郁子さん
(写真中央・左)ハッピーパワー溢れる素敵なひまわりさん
(写真中央・右)色彩が織り成す朝の風景

■連絡先 〒078-2512 北海道雨竜郡北竜町字和55-17
☎ 080-5424-5514

過労による若年性認知症と診断され、退職し、住み慣れた東京を離れ、認知症治療のため、北海道に移住。認知症の克服と併せて、夫婦二人三脚でこれまでの技能・技術を活かした町のPRポータルサイト制作、情報発信等を積み重ね、ふるさと納税倍増等に大きく貢献しました。地域住民と交わり、地域に溶けこんだ生活は感動的で、同じような境遇の人々に大きな元気を呼び起こすと高く評価されました。

オーライ! ニッポン ライフスタイル賞

かど わき ふ じ み
門脇 富士美さん

せんぼくし
(秋田県仙北市)

【留学が原点】

20代の頃、留学先の中国で自分の国、故郷について熱く語るルームメイトに対し、何も語れない自分に気づき、故郷や家業を知ろう、地に足のついた生き方をしようと秋田に帰郷しました。その後、中山間地域の小規模農家として、両親と共に「ほうれん草栽培」をしつつ、1998年から宿泊業、2002年から菓子製造業を組み合わせることにより、条件不利地域ながら専業農家として、豊かでもなくともそれなりの暮らしをすることを目指してきました。



【若手女性農業者のパイオニア】



現在は、仙北市農山村体験推進協議会の副会長として、市内の他の農家民宿等とも協力して、個人から団体まで多くの旅行者の受け入れやNPO法人秋田花まるっグリーン・ツーリズム推進協議会の理事長も務め、秋田県のグリーン・ツーリズムの推進にも力を入れています。また、農家民宿「星雪館」と仙北市にある全ての文化、活動、資源を、都市部と農村部、世界と仙北市、また様々な人と人とを繋げて、様々な可能性を広げていきたいと「繋ぎ手」として地域の発展に貢献したいと考えています。実践者として、繋ぎ手として、若手女性農業者のパイオニア的存在として関係者から厚い信頼を得ています。

【地域の味と文化を発信する実践者、交流の繋ぎ手として】(活動の主な経緯)

【1996年】国内外の農業体験希望者の受入、日本農業への理解を進めることも目的として農家の暮らし体験を実施【1998年】「農家の宿星雪館」の開業と国内外の旅行者の宿泊の受入(2018年は1組限定の宿として、年間宿泊者数330人のうち半数が外国籍)【2007年】秋田内陸縦貫鉄道「ごっつお玉手箱列車」への食事の提供(秋田県の内陸を南北に走る第三セクターの鉄道が企画するイベント列車に、地域の特産の西明寺栗を使った栗ご飯やおやき、寒天など何品か提供)【2012年】台湾の中高生の学習旅行の受入【2016年】んみゃものバイキング〜もち編(星雪館を会場に10数種類の味の餅をバイキング形式でお客様に食べてもらうイベント。数種類のお漬物や季節の食材を使ったお料理も並ぶ。んみゃものとは地域の方言で「美味しいもの」という意味)【2018年4月】「ひのマルシェ」) 桜木内郵便局マルシェの略) 桜木内郵便局内での野菜の無人販売。1番近いスーパーまで車で30分かかるため、桜木内地域での買い物難民の解消と、野菜を買いに来る人々の情報交換の場づくり。秋田県内初の取り組み。



【半農半エクスしませんか?】

門脇さんの活動を見て地域で活動する若手女性農業者が誕生しています。この地域の新しい女性のライフスタイルを示すことになりました。スーパーまで車で30分の山中でも、雪の降る地域の小規模農業でも心豊かにいきいきと暮らしていける。田舎暮らしを考えている皆さん、農業と何かとの組み合わせで是非一緒に楽しみましょう。

■写真の説明

(写真上) 門脇 富士美さん (写真中央左) 仙北市農山村体験推進協議会の仲間と
(写真中央・右) 自転車での星雪館の周辺を散策。前田商店で休憩し、時にはお婆ちゃん達とおしゃべりがまた楽しい。冬の風物詩、かきもちづくり

■連絡先 〒014-0602 秋田県仙北市西木町桜木内字大台野開404
☎ 0187-48-2914

日本でグリーン・ツーリズムがスタートして凡そ30年。農家民宿の後継者が大きな課題のなかで、次世代の若女将が跡を継ぐということを証明。農山村にUターンして家業を継ぐというライフスタイルを発信しつづけ、同世代や次世代につなげていってもらいたいとその活動は高く評価されました。

オーライ! ニッポン ライフスタイル賞

こう さか まさる
高坂 勝さん

(千葉県そうさし匝瑳市)

【減速して自由に生きる ダウンシフターズになる】

高坂さんは横浜に育ち、大学に通い、企業に就職し成果も順調に出して歩んでいました。その順風満帆な生活は、数年で終わり、バブル経済が弾けて市場が縮小しているのに、根拠も無く対比110%の売上や利益目標を命令されて、達成できない日々徐々に心労がかさみ30歳で退職しました。そして、お金で消費しなければ何も得られない自分を省みて、1年の放浪後、石川県に移住し、料理、農作業などを少しずつ自分で「できる」に変え、一方で図書館に通い、行き詰まった経済・政治・社会・環境などの課題解決への道を自主的に研究しました。



【消費を落とせば、そんなにお金は必要でなくなる】



そして、持続可能な未来への答えを实践すべく、34歳の時に、池袋に一人で営むOrganic Bar「たまにはTSUKIでも眺めましょ」を開業しました。後に世間から「退職者量産バー」と呼ばれました。必要以上儲けないビジネスを確立し、売上が上がりそうになると休みを増やして必要以上儲けないようにしました。週休2日に移行した折には、お米を自給すべく千葉県匝瑳市の田んぼに通う二拠点生活に移行したのです。店のお客さんも次々と米作りに参加するようになりました。地元から要請されてNPO法人を匝瑳市に創設し、2011年には、週休3日に移行しました。当時としては大変珍しい取り組みであると、NHKを始めとした大手メディアに多く取り

上げられました。経済成長を目指さずとも、幸せになれるライフスタイル論・ナリワイ論・経営論、自分や家族の分の自給(半農半X)論、地方移住のススメ、次の時代の脱成長なる社会ビジョン等々の考え方を『減速して自由に生きる～ダウンシフターズ』(幻冬舎、筑摩文庫)として記し世間に発信しました。(経済成長を追い求める企業でストレスを抱え、自分の時間も無く働く人生よりも、小さく自営し、人と交流し、やりたいことをしたい。幸せに生きる個人が増えることで、社会は変わる)

【ダウンシフターズの考えに共感した人が農村へ】

メディア、ブログ、SNSやお店(Organic Bar「たまにはTSUKIでも眺めましょ」)を通じて、田んぼを通じて、共感した人々(数千人)が、なりわい・起業・半農半X・就農・地方移住へと行動を起こし歩み出して行きました。

2018年には、Organic Barを閉じ、匝瑳市に完全移住しました。

現在は、地域課題解決のための豊和村作り協議会の立ち上げに携わり、代表として、幼稚園や小学校やご年配者の課題解決(荒れた竹林の解消・買い物難民・移動難民・子ども預かりなど)に取り組んでいます。また、地域の草刈りや里山保全活動への参画、ゴミ廃棄農地解消の共同作業への参画、ソーラーシェアリング(発電と農業の融合)事業へのコミット、地域の方々との共同イベントなどいそしみ、その信頼関係構築により、空き家の情報や提供が寄せられて、都心からの移住者受け入れにつながっています。そして、地域や地域の方のニーズと、移住者のナリワイがマッチする場合に互いをつなぎ、課題解決に結ぶ活動を展開しています。



■写真の説明

(写真上)自らのバーにてオーガニックでシンプルな調理を伝える高坂 勝さん (写真中央・左)稲刈り方法を伝授 (写真中央・右)田んぼに隣接する里山にワークショップで作上げた 伝統製法のスモールハウスやトイレや風呂や薪棚

■連絡先 〒289-2113 千葉県匝瑳市平木8786-28

☎ 090-9322-8722

無理をしない生き方である「ダウンシフト」は団塊ジュニア世代だけでなく、いまの20～30歳代にも深くささる生き方。自らの実践がフォロワーを増やし、結果的に移住につながっていく、まさにライフスタイルの提案として、近場のイナカ暮らしを提案し続けていることは、昨今のコロナ移住の中でさらに輝きを見せるかもしれないと高く評価されました。

オーライ! ニッポン ライフスタイル賞

みず の ひろ ゆき
水野 裕之さん

うわじまし
(愛媛県宇和島市)

【笑顔になってほしい。「日光」、太陽のような温かい場所になりたい。】

人口800人、柑橘と漁業が主な産業、60歳以上の人口が7割を超える宇和島市の九島地区地域おこし協力隊に採用され、2018年家族3人で移住しました。夫婦で島唯一の飲食店、島を体験するごはん屋さん「nicco」を営業しています。約10年間空き家だった場所を自身でリノベーション。島民の思い出の場所でもあった空き家は、子どもの頃の遊び場でもあったお年寄りが遊びに来てくれる場所にもなりました。大手リゾート会社での有名観光地での赴任経験を活かして、そこでしか味わえないモノの価値に気づいて、「ニコニコ」、ここに来たら笑顔になってほしい。「日光」、太陽のような温かい場所になりたい、島民にとっても島外のひとにとっても、だれもが笑顔で戻ってきたくなる場所をめざしています。



【星野リゾートで経験を積む】



水野さんは、千葉縣市原市出身。大学時代の2013年パッケージデザインコンペにて入賞しました。この経験は、世に物を残す感動と素晴らしさを体感することができました。就職活動中に世に製品を残す仕事は、売り場には居ない。つまり直接、購入者の顔（笑顔）見られない。接客業は、最前線で接客ができる。つまり、お客さんの顔（笑顔）見ることができる。自分には、接客業の方が働く上での喜びを感じると気づいたので、星野リゾートに2014年入社しました。

星野リゾートでは、沖縄県小浜島、福島県裏磐梯、さらに2015年には、京都府嵐山、その後新規施設オープニングスタッフとして、山梨県河口湖と転勤と日本各地の自然あふれる観光地で接客、清掃、調理、備品購入、アクティビティ企画立案、マニュアルづくりまでホテル業の全ての経験を積むことができました。

また、転勤をする中で「そこでしか味わえないモノの価値」に気づくことができました。それは、「体験+人=そこでしか味わえないモノ」ということです。現代は、絶景は一度見たら次は別の場所に行きたい。美味しいものは通販で手に入るという状況です。しかし体験（絶景、食事、アクティビティなど）は、人を通すことで味わう事で“また来たい場所”になり得るのです。持続可能な地域を発展させるためには、そこにしかないものが重要です。



【そこでしか味わえないモノ 島唯一の飲食 nicco】

元々、したかった“また来たくなる飲食店”を作ろうと2018年に、宇和島市九島地区担当の地域おこし協力隊に転職して、夫婦で島唯一の飲食「nicco」を創りました。自慢は、島の地の食材、日本のお酒。また、空時間を利用して島の山菜、筍、蜂蜜、竹皮取り、魚、柑橘などの食材調達や庭で野菜、ハーブ類も栽培しています。島全体を使ってウェディングを挙げる島ウェディングや島お婆の麦味噌づくりを島外の人と一緒に作る体験を企画し、毎年開催しています。



■写真の説明

(写真上)水野さん一家 (写真中央・左)ごはん屋さんniccoのオープン
(写真中央・右)島内サイクリイベントとそのイベントで食べる地元の幸
(写真中央・下)九島みそづくりトリップ

■連絡先 〒798-0096 愛媛県宇和島市本九島1389

☎ 090-2822-3918



観光業に従事したからこそ、消費対象ではない農山村をどう魅せていくのか、という視点が光ります。経験を活かして様々な困難な状況にある島の生活を維持・活性化するユニークな例として、コロナ禍のライフスタイルとしてもその企画力と多角的な事業展開力に大いに期待したいと高く評価されました。

第18回オーライ！ニッポン大賞の概要

趣 旨

都市と農山漁村の共生・対流に関する活動を行いながら、交流の拡大や地域活性化に寄与した団体・個人、及び都市と農山漁村双方の生活や文化を楽しむライフスタイルを実践している個人を表彰し、その活動を広くPRすることで農山漁村を舞台とした新たなライフスタイルの普及推進を図ることを目的としています。

表彰対象・審査基準

オーライ！ニッポン大賞

「都市側から人を送り出す活動」、「都市と農山漁村を結びつける活動」、「農山漁村の魅力を活かした受入側の活動」等を通じて、都市と農山漁村の共生・対流の拡大に寄与した実績や効果の高い団体又は個人。

(1) 募集の対象

- ・学生若者カツヤク都市のチカラ部門…主に30代までの若者の活躍や都市側からの働きかけにより推進されている活動
- ・交流イノベーション部門……………新型コロナウイルス禍により、新たにはじめられた農山漁村支援の取り組み
- ・農山漁村イキイキ部門……………主に農山漁村側からの働きかけによって推進されている活動

(2) 表彰の種類

オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）1件
オーライ！ニッポン大賞 3件程度
審査委員長賞 3件程度

(3) 審査の基準

新規性	農山漁村地域を舞台とした新たなライフスタイルの提案、普及に関する取り組みやコロナ禍での工夫したもの。
独自性	地域固有の資源や個性を活かした、オリジナリティ豊かな取り組みであること。
持続性	法人化や収益向上等により持続性の高い取り組みであること。
モデル性	他地域への応用や波及が期待できるモデル性の高い取り組みであること。
効果性	農山漁村地域を活性化する効果があり、今後も効果が持続して発現すると見込まれること。
社会性	地域の内外の多様な主体が参加連携し、地域の課題解決に取り組んでいること。

オーライ！ニッポン ライフスタイル賞

都市部から移住したUJターン者もしくは都市と農山漁村を行き来する二地域居住者等のうち、農山漁村地域において共生・対流の活動に取り組みながら、魅力的なライフスタイルを実践している個人。

(1) 表彰の種類

ライフスタイル賞 3件程度

(2) 審査の基準

新規性	農山漁村を舞台とした新たなライフスタイルの実践やコロナ禍での工夫したもの。
独自性	個性的で魅力のある活動であること。
継続性	新たなライフスタイルの実践に継続性があること。
モデル性	新たなライフスタイルが他の人の参考となるものであること。

第18回オーライ！ニッポン大賞審査委員会の構成

会長	安田 喜憲	ふじのくに地球環境史ミュージアム館長（オーライ！ニッポン会議副代表）
	井上 和衛	明治大学名誉教授
	岡島 成行	公益社団法人日本環境教育フォーラム会長、学校法人青森山田学園理事長
	嵩 和雄	國學院大學研究開発推進機構 地域マネジメント研究センター 准教授
	志村 格	一般社団法人日本旅行業協会理事長
	長岡 杏子	(株)TBSテレビ アナウンサー
	平野 啓子	語り部、かたりすと、大阪芸術大学放送学科教授（オーライ！ニッポン会議副代表）
	元石 一雄	NPO法人水と緑の環境フォーラム常務理事



第18回オーライ!ニッポン大賞 受賞者一覧

オーライ!ニッポン大賞グランプリ

- 1 福井県 坂井市
一般社団法人 竹田文化共栄会

オーライ!ニッポン大賞審査委員長賞

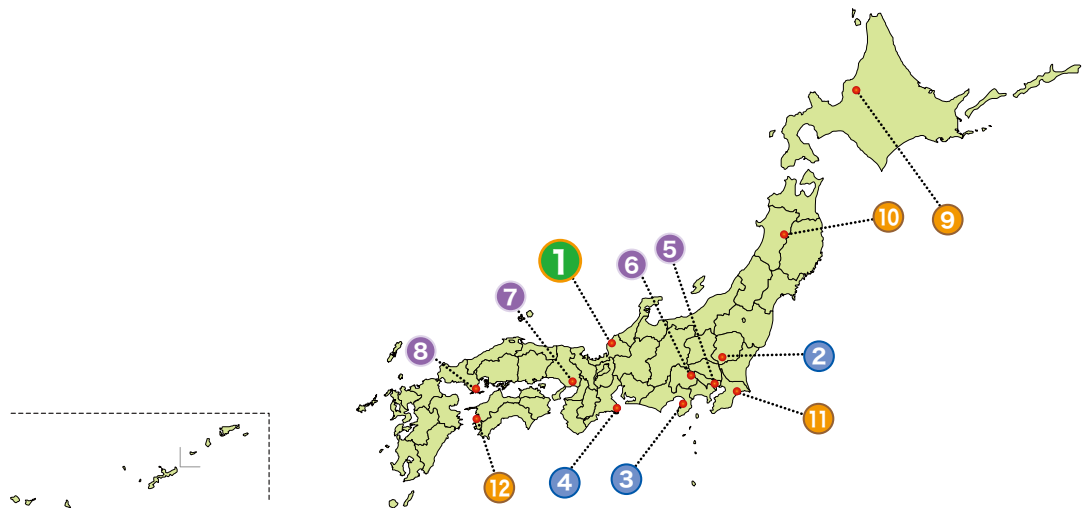
- 5 東京都 渋谷区
認定特定非営利活動法人 サービスグラント
- 6 山梨県 丹波山村
特定非営利活動法人 小さな村総合研究所
- 7 兵庫県 神戸市
特定非営利活動法人 Peace & Nature
- 8 山口県 周防大島町
ロコネクト合同会社

オーライ!ニッポン大賞

- 2 栃木県 栃木市
特定非営利活動法人 自然史データバンクアニマ net
- 3 静岡県 沼津市
元沼津市地域おこし協力隊 青山 沙織
- 4 三重県 鳥羽市
有限会社 兵吉屋

オーライ!ニッポン ライフスタイル賞

- 9 北海道 北竜町
寺内 昇さん・郁子さん
- 10 秋田県 仙北市
門脇 富士美さん
- 11 千葉県 匝瑳市
高坂 勝さん
- 12 愛媛県 宇和島市
水野 裕之さん



オーライ!ニッポン会議 事務局

〒101-0042 東京都千代田区神田東松下町45番地 神田金子ビル5階
TEL 03-4335-1985 FAX 03-5256-5211 ホームページ <https://www.kouryu.or.jp/service/ohrai.html>

「オーライ!ニッポン会議」の事務局を構成する20団体

- | | | | |
|------------------|-------------------------|----------------------|----------------|
| (公社)全日本郷土芸能協会 | (一財)日本青年館 | (公財)日本修学旅行協会 | (公財)全国修学旅行研究協会 |
| (公社)日本観光振興協会 | (公社)日本青年会議所 | 日本商工会議所 | 全国商工会連合会 |
| (一財)伝統的工芸品産業振興協会 | (一財)地域開発研究所 | (公財)日本離島センター | (公財)都市計画協会 |
| (一財)地域活性化センター | (公財)育てる会 | (公財)パブリックヘルスリサーチセンター | |
| (公社)日本環境教育フォーラム | 全国水土里ネット(全国土地改良事業団体連合会) | 全国森林組合連合会 | |
| (一財)漁港漁場漁村総合研究所 | (一財)都市農山漁村交流活性化機構 | | |